

# Google Workspace と Microsoft 365

## 自社に最適な選択とは？

365 社の調査データが示す「導入後の実態」

---

吉積情報株式会社

2026 年 4 月

# 目次

<b>1.【はじめに】なぜ今、Google Workspace と Microsoft 365 の「活用実態比較」が必要なのか？</b> .....	<b>3</b>
1.1 デジタル変革(DX)の核心にある「コラボレーション基盤」.....	3
1.2 二大プラットフォームの覇権と「選択」の重み.....	3
1.3 本ホワイトペーパーの目的と視座：機能比較から「実態比較」へ.....	4
<b>2.【総合比較 ①】利用企業の「満足度」が高いのはどちらか</b> .....	<b>6</b>
2.1 デジタルツールの満足度比較.....	6
2.2 利用頻度から見る「業務への浸透度」.....	8
2.3 考察：活用実態から見えたUX(ユーザー体験)の価値.....	9
<b>3.【総合比較 ②】利用企業の「カルチャー」の違い</b> .....	<b>11</b>
3.1 新しい挑戦と失敗に対する寛容さ.....	11
3.2 チームワークと成果意識.....	12
<b>4.【シーン別比較 ①】「コミュニケーション」の効率性比較</b> .....	<b>13</b>
4.1 社内コミュニケーションのスピード感.....	13
4.2 会議の効率性と事前準備の質.....	14
4.3 外部企業とのコミュニケーション.....	16
<b>5.【シーン別比較 ②】「情報共有」の意欲度とタイムリー性の比較</b> .....	<b>18</b>
5.1 情報共有の意欲度.....	18
5.2 共有手段の比較.....	19
5.3 情報のタイムリー性.....	20
5.4 考察：ストック型とフロー型の融合.....	21
<b>6.【シーン別比較 ③】「資料作成」と「情報検索」の特性の比較</b> .....	<b>22</b>
6.1 資料作成方法の実態.....	22
6.2 資料作成にかけている時間.....	24
6.3 資料作成の満足度.....	24
6.4 メールにかけている時間.....	25
6.5 情報検索の満足度.....	26
<b>7.【シーン別比較 ④】「情報セキュリティ」の実態比較</b> .....	<b>28</b>
7.1 文書管理規程の運用.....	28
7.2 機密情報漏えい対策.....	28
7.3 アクセス権限の不便さ.....	29
<b>8.【シーン別比較 ⑤】「生成 AI」の利用用途と効果比較</b> .....	<b>31</b>
8.1 生成 AI 導入企業における利用用途.....	31
8.2 生成 AI 導入企業における効果の実態.....	32
<b>9.【まとめ】調査データから見えたツール選定のポイント</b> .....	<b>35</b>
9.1 Microsoft 365 を選ぶべき企業.....	35
9.2 Google Workspace を選ぶべき企業.....	35
9.3 吉積情報からの提言：データドリブンな意思決定と確実な移行に向けて.....	36

# 1. 【はじめに】なぜ今、Google Workspace と Microsoft 365 の「活用実態比較」が必要なのか？

## 1.1 デジタル変革(DX)の核心にある「コラボレーション基盤」

デジタルトランスフォーメーションが進む現在、企業が選定するクラウド型コラボレーションツールは、働き方や企業文化に大きな影響を与えます。特に Google Workspace と Microsoft 365 は世界中の多くの企業で導入されており、メールやチャット、オンライン会議からドキュメント作成、情報共有、さらには生成AIまで幅広い機能を提供しています。それぞれのツールがもたらす効果や利用実態を正しく理解することは、企業の競争力強化につながる戦略的な IT 投資判断の材料となります。

この変革の成否を握る最も基本的な要素が、全従業員が毎日、毎時間、業務のあらゆるシーンで利用する「コラボレーションツール(グループウェア)」です。かつては単なる「連絡手段」や「文書作成ソフト」に過ぎなかったこれらのツールは、今や企業の意思決定のスピード、情報の透明性、さらには組織文化そのものを規定する「デジタル・ワークプレイス(デジタルの職場)」へと進化しています。従業員がどのような環境で、どのように情報を共有し、意思疎通を図っているか。そのデジタルの作法こそが、企業の競争力を決定づけるのです。

## 1.2 二大プラットフォームの覇権と「選択」の重み

現在、世界の、そして日本のビジネスシーンにおけるコラボレーション基盤は、事実上二つの巨大なプラットフォームによって二分されています。

一つは、長年にわたりデスクトップ・アプリケーションのデファクトスタンダードとして君臨し、その親和性を武器にクラウド化を進める **Microsoft 365** です。Microsoft 365 は、Word、Excel、PowerPoint といった長年にわたり業界標準として使われてきた強力なデスクトップアプリケーションのフル機能版を提供しており、従来の操作性を重視する組織に最適です。特に、複雑なデータ分析や高度な文書作成、あるいはオフラインでの作業や高度な処理が求められる場合にその真価を発揮します。また、Active Directory との深い統合、高度なセキュリティ・コンプライアンス機能、大規模組織向けの管理機能といったエンタープライズ向けの機能も充実しているため、特に既存の Microsoft エコシステムを利用している企業にとっては導入しやすいサービスです。

もう一つは、クラウドネイティブな環境で、リアルタイム・コラボレーションを武器にシェアを拡大してきた **Google Workspace** です。こちらは「チームのコラボレーション」を最優先に設計されています。

多くの経営層や IT 部門責任者は、これら二つのツールを比較検討する際、「機能の有無(○×表)」や「ライセンスコスト」といった定量的なスペック比較に終始しがちですが、本質的な問いは「今の業務を維持(Re-production)したいのか」、それとも「仕事のやり方そのものを破壊・再構築(Transformation)したいのか」という経営意思にあります。

「Excel のマクロが動くか」「Word の罫線がズレないか」といった互換性の議論は重要ですし、「Excel のマクロ資産」や「精密な帳票作成」は企業にとって、業務の連続性を担保する上で極めて重要です。一方で、DX を推進するうえでは「そのツールを使うことで、従業員の行動や意識がどう変わり、どのような企業文化が醸成されるの

か」という定性的な価値も同様に重要な視点となります。本資料では、この「働き方への適合性」という観点から両者の実態を比較します。

### 1.3 本ホワイトペーパーの目的と視座：機能比較から「実態比較」へ

本ホワイトペーパーは、吉積情報株式会社が実施した独自調査のデータに基づき、カタログスペックや宣伝文句からは見えてこない、導入企業の「リアルな姿」を明らかにすることを目的としています。

調査データは、これら二つのプラットフォームが、実際に利用されている現場でどのような「満足度」を生み出し、どのような「コミュニケーションの質」をもたらし、そしてどのような「組織カルチャー」と相関しているのかを客観的に映し出しています。

本レポートは、単なるツールの優劣を論じるものではありません。貴社が目指す組織像、変革のスピード感、そして従業員に提供したい体験価値に照らし合わせ、どちらのプラットフォームが有効なツールとなり得るのか。その戦略的な意思決定を行うための、データドリブンな「羅針盤」を提供します。

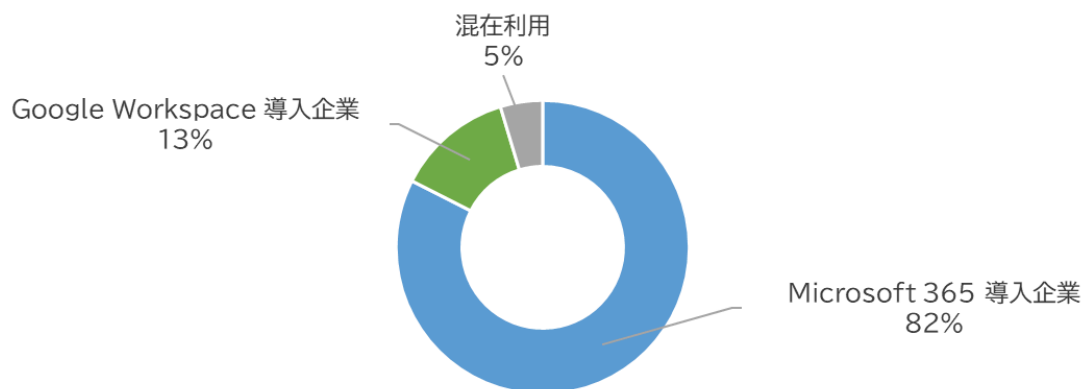
#### ■ 本ホワイトペーパーのデータソースと解釈に関するご注意

本レポート内の数値は、吉積情報株式会社が2025年に実施した「IT活用に関する実態調査」および関連する分析データに基づくものです。この調査では、537社から有効回答が得られました。そのうち、Microsoft 365、Google Workspace を利用している企業の回答は365社です。

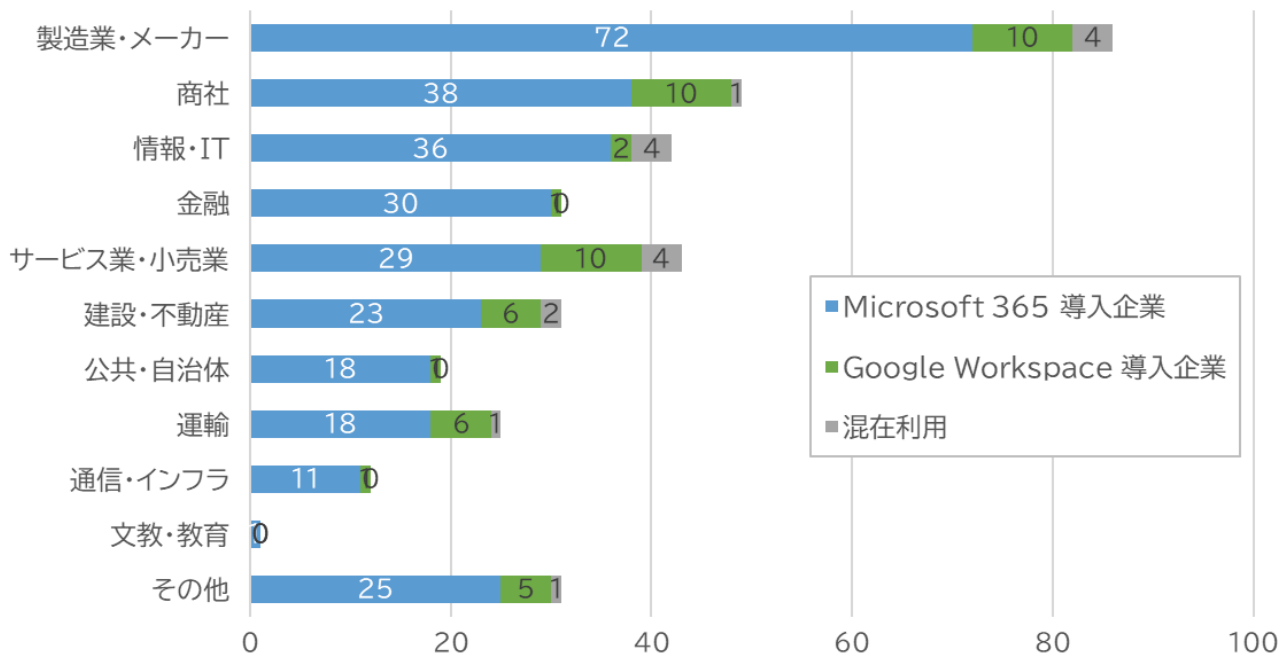
- 本レポート内の数値は、吉積情報株式会社が2025年に実施した「IT活用に関する実態調査」および関連する分析データに基づくものです。
- Microsoft 365 利用企業(301社)と Google Workspace 利用企業(47社)ではサンプル数に違いがあるため、本調査結果および考察文は両ツールの利用実態を把握するための一つの参考指標としてご活用ください。ツールの導入効果は各企業の組織規模、方針、ITリテラシー、運用ルールによって大きく異なる場合があります。

Microsoft 365 利用企業	301
Google Workspace 利用企業	47
混在利用企業	17

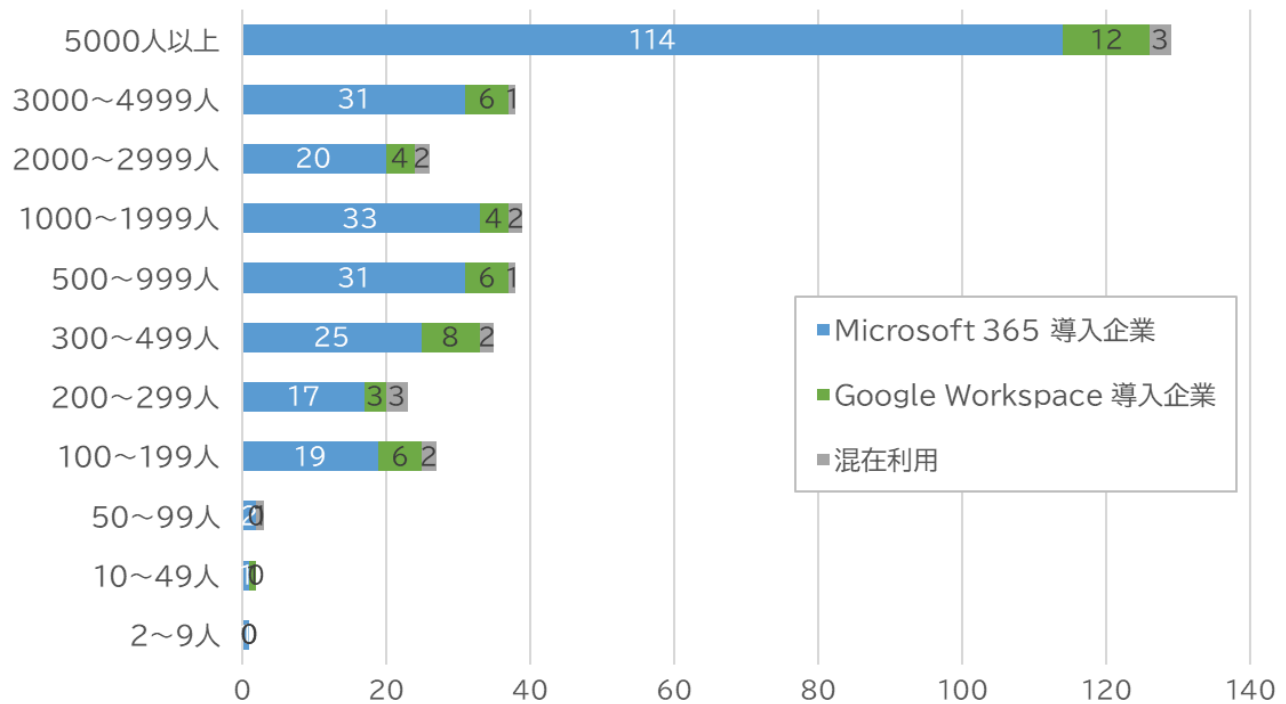
【調査データ内訳】全体分布



【調査データ内訳】業種別分布



【調査データ内訳】従業員数別分布



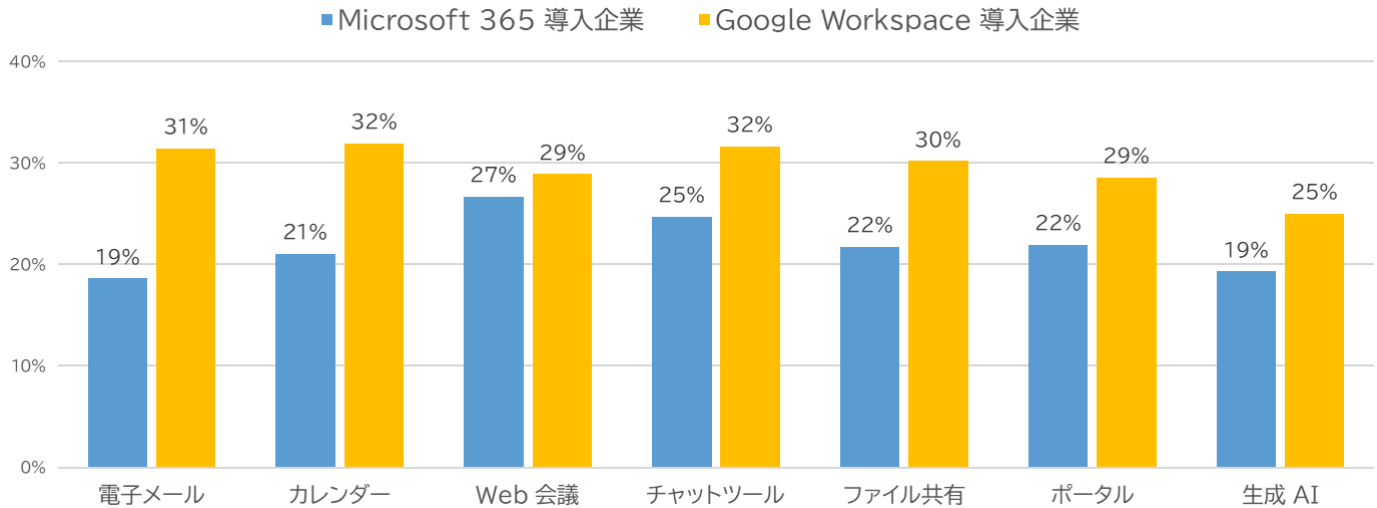
## 2. 【総合比較 ①】利用企業の「満足度」が高いのはどちらか

企業のデジタル環境において、従業員がツールに対して抱く「満足度」は、単なる好みの問題ではありません。それは従業員エンゲージメント(会社への愛着や貢献意欲)や、日々の生産性に直結する極めて重要な KPI です。調査データを詳細に分析すると、主要なアプリケーションにおける満足度の構造に、両ツールの設計思想の違いが色濃く反映されていることが判明しました。

### 2.1 デジタルツールの満足度比較

以下のグラフと表は、電子メール、カレンダー、Web 会議、ファイル共有といった主要アプリにおける、両ツール利用者の満足度分布を比較したものです。

■ 調査データ: 主要アプリ別「満足層」の分布(「満足回答」の割合)



有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 301 | Google Workspace 導入企業 47

■ 調査データ: 主要アプリ別「満足層」「中間層」「不満層」の分布

デジタルツール	評価	Microsoft 365 導入企業 (%)	Google Workspace 導入企業 (%)
電子メール	満足層	19%	31%
	中間層	58%	47%
	不満層	22%	21%
カレンダー	満足層	21%	32%
	中間層	62%	47%
	不満層	15%	15%
Web 会議	満足層	27%	29%
	中間層	57%	64%
	不満層	14%	4%
チャットツール	満足層	25%	32%
	中間層	57%	53%
	不満層	14%	11%
ファイル共有	満足層	22%	30%

	中間層	55%	49%
	不満層	22%	21%
ポータル	満足層	22%	29%
	中間層	58%	57%
	不満層	20%	14%
生成 AI	満足層	19%	25%
	中間層	53%	58%
	不満層	18%	8%

### ■ 分析と考察:なぜ Google Workspace の「満足層」の割合が高いのか

調査データによれば、両プラットフォームともに「普通」以上の評価が大多数を占めており、ビジネスインフラとして十分な信頼を得ていることが分かります。一方で、「満足層」の分布傾向には以下の違いが見られます。調査データが示す通り、ユーザーの満足層については、今回の調査回答の範囲内においては、Google Workspace 利用企業の方が「満足」側の回答比率が高い傾向が見られました。背景には、シンプルで直感的なインターフェースや検索性能の高さが挙げられています。

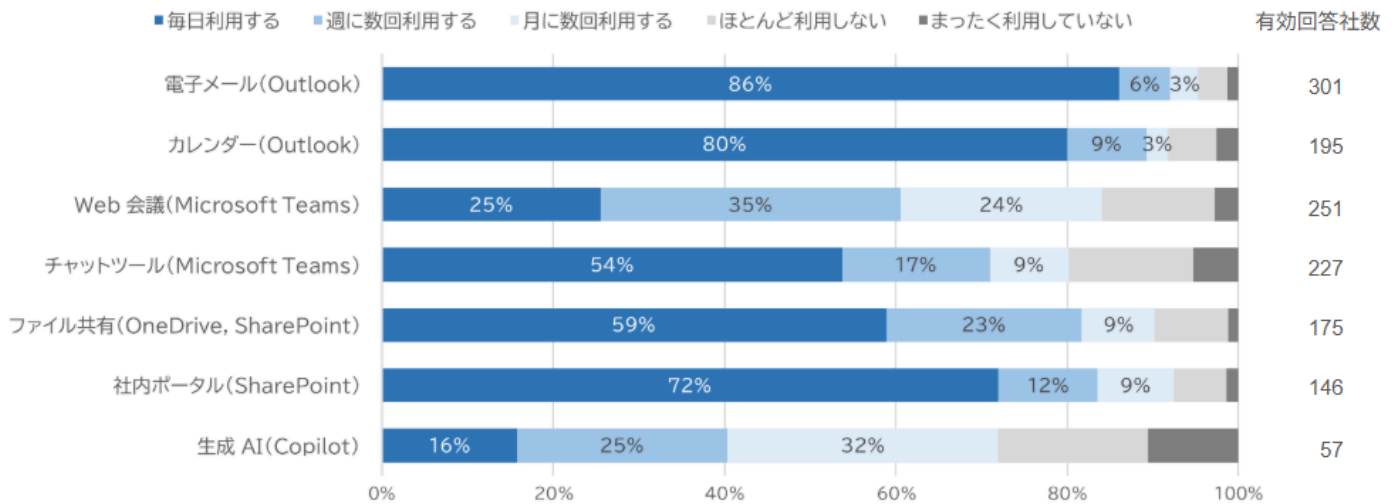
- **Microsoft 365 (Outlook/Teams):** 突出した不満が少なく、極めて安定した評価を得ています。これは長年デファクトスタンダードとして利用されてきたことで、ユーザーにとって「使い慣れた標準的な道具」として深く定着しているためと考えられます。一方で、Teams の不満率(14%)については、多機能ゆえの操作ステップの多さや、デスクトップアプリとの連携における処理負荷が、回答結果の一因となっている可能性が考えられます。
- **Google Workspace (Gmail/Drive):** Gmail の強力な検索機能やスレッド表示、Drive の高速なプレビュー機能など、クラウドネイティブな設計によるレスポンスの速さが、ユーザーの「作業時間の短縮」という直接的な体感価値につながりやすく、これがポジティブな加点評価を生んでいるものと推察されます。

## 2.2 利用頻度から見る「業務への浸透度」

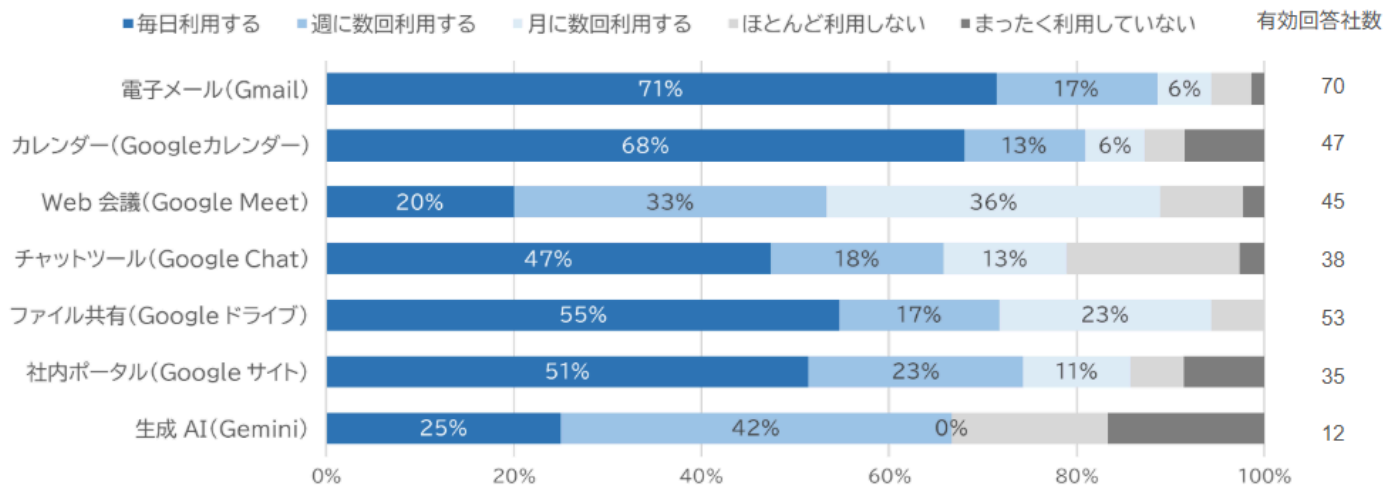
満足度だけでなく、ツールがどれだけ日常業務に組み込まれているか(定着度)も重要な指標です。

以下のグラフは、Microsoft 365・Google Workspace 導入企業それぞれが、主要アプリをどのくらいの頻度で利用しているか平均をまとめたデータです。

### Microsoft 365 利用頻度



### Google Workspace 利用頻度



#### ■ 分析と考察:

Microsoft 365 の方が、全体的に「毎日利用する」の割合が高く、主要な機能においてより深く、日常的に定着して利用されている傾向が見られます。

- 特に電子メール、カレンダー、社内ポータルの3項目で、Microsoft 365 の「毎日利用」率が Google Workspace を10ポイント以上上回っており、Microsoft 365 が企業の基幹的な業務ツールとして非常に高い頻度で利用されていることが伺えます。これは、Microsoft が長年 Outlook/Exchange を中心としたオフィス環境が標準として普及してきた歴史的背景に加え、組織内での統合された利用環境が強く影響

していると考えられます。

- 生成 AI の利用頻度は、他のツールとは異なる傾向を示しており、注目すべき点です。Google Workspace (Gemini) は、「毎日利用」と「週に数回利用」を合わせた利用者が 67% と、Microsoft 365 (Copilot) の 41% を大きく上回っています。これは、2025年に Gemini が Google Workspace の標準機能として組み込まれたことにより、AI 機能が広く・自然にユーザーに受け入れられていることを示しています。一方、Copilot は、有料のアドオンであること、または大規模な組織・特定の部署での導入が先行しており、全社的な浸透にはまだ時間がかかっている段階にあることを示唆していると考えられます。

### 2.3 考察：活用実態から見えたUX(ユーザー体験)の価値

Microsoft 365 導入企業の多くが回答した「普通」という評価は、インフラとして業務に深く浸透し、「意識させないほどの安定性」を提供している証左と言えます。業務を止めることなく、既存のワークフローを確実に遂行するための基盤として、Microsoft 365 はその信頼性を十分に果たしていると言えます。

一方で、企業が「業務プロセスの抜本的な変革」や「自発的なコラボレーションの活性化」を重視する場合は、さらなる活用へのアプローチが有効です。Google Workspace 導入企業が高い満足度を示している傾向は、ツールが単なるインフラを超え、「使うことで仕事が速くなる」といった実務的な効率化の実感を通じて、ユーザーがより高度な活用に前向きに取り組む推進力として機能している可能性を示唆しています。

今後のデジタル戦略においては、業務の継続性を支える「確実な運用」という視点を土台にしつつ、「従業員の創造性やスピード感を最大限に引き出すための体験 (UX) の最適化か」という視点も欠かせません。

調査結果から見える、Google Workspace の「シンプル・高速・直感的」な操作性がもたらす「仕事のしやすさ」は、結果として活発な情報共有やイノベーションを後押しする土壌となります。経営層は機能の比較だけでなく、現場の従業員が自発的に活用を広げたいくなるような、操作性や体感価値を評価軸に加えることが、投資対効果 (ROI) を高める鍵になると考えられます。

---

### 3.【総合比較 ②】利用企業の「カルチャー」の違い

～ツールが組織風土を作る: 共創による加速か、規律ある着実な成長か～

日常的に使用するコラボレーションツールは、組織のコミュニケーション様式や、カルチャー(企業風土)に大きな影響を及ぼします。この調査では、「新しい試みへの柔軟性」「組織内の連携」「ナレッジの共有」といった項目に基づきGoogle Workspace と Microsoft 365 を利用するそれぞれの企業においてどのような組織文化の傾向や働き方の特性が見られるかを比較・分析しました。

#### 3.1 新しい挑戦と失敗に対する寛容さ

市場環境の変化が加速するなか、各企業は自社の戦略に合わせた組織文化の醸成に取り組んでいます。本節では、「新しい試みへの着手」や「試行錯誤に対する組織の許容度」について、導入ツール別に意識調査を行いました。ツールの設計思想や共有のスピード感が、意思決定のプロセスや現場の挑戦意欲にどのような相関関係をもたらしているのかを分析します。

■ 調査データ: 組織カルチャーに関する意識調査(「肯定的な回答」の割合)

設問項目	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
新しい考え方や失敗リスクのある取組みに協力的か?	39%	44%
同僚や後輩が困っている時、積極的に協力しているか?	67%	70%
失敗やミスが起きた場合、チーム全体で解決しようとしているか?	67%	74%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

「新しいことへの挑戦意欲」「部署内の協力姿勢」「失敗からの学習」といった組織風土に関する項目において、Google Workspace 導入企業において、各項目への肯定的な回答割合が高い結果が得られました。。このデータから、日々の業務で使用するツールの機能特性と、従業員の行動様式(組織カルチャー)との間に一定の相関があることが推測されます。

Google Workspace のアーキテクチャが持つ「リアルタイムな情報共有・コラボレーション(同時編集)」や「作成過程から可視化されるオープンな設計」は、完成品のみを評価するのではなく、プロセスの中で段階的に他者のフィードバックを得るワークフローを日常化させます。こうした「未完成の状態でも見せ合う」というコミュニケーション

ンの反復が、結果として部門内での「助け合い」や「失敗からの早期の軌道修正(学習)」を促しやすく、組織の心理的安全性を高めることや、失敗を恐れずに挑戦しやすい環境を後押しする一因として作用している可能性が示唆されます。情報共有基盤(ツール)というハード面の導入が、従業員の「行動変容」を促し、結果として「助け合い」や「学習」といった組織カルチャーの醸成にも影響を与えうる要素であることが伺えることを示す、興味深いデータと言えます。

### 3.2 チームワークと成果意識

設問項目	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
過去1年間で、あなたの部署は、成果を上げているか？	59%	48%
一人で仕事を進めるのと、チームメンバーと仕事をするのでは、どちらのほうが生産性が高いですか？	38%	37%
現在の仕事量について、時間に余裕はありますか？	30%	30%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

#### ■ 分析と考察:

本調査の回答範囲においては、Microsoft 365 導入企業のほうが、「部署の成果を上げている」と回答する割合が高い傾向が見られました。この背景には、Microsoft 365 が Office 製品との高い互換性や、Teams を中心とした会議・プロジェクト管理の統合性に優れている点が挙げられます。これにより、既存の業務プロセスや大規模組織の統制が図りやすく、安定した運用による着実な生産性の向上と成果創出に直結しやすい可能性があります。

一方、両ツールを導入している企業群に共通する課題として、「チームワークが個人作業よりも生産的である」という実感が低い点、および従業員の「時間に余裕がある」という意識が低い点があります。これは、ツールの導入効果とは別に、組織全体の仕事の進め方や業務設計、あるいは会議文化などに根本的な改善の余地があることを示唆しています。

## 4.【シーン別比較 ①】「コミュニケーション」の効率性比較

～「連絡が取れない」「探せない」ストレスからの解放～

業務の生産性を左右する重要な要素の一つが、関係者との円滑なコミュニケーションです。連絡手段を探す「迷い」や、相手の反応を待つタイムラグは、業務プロセスの停滞に直結します。シーン別比較の第一弾として、両ツールの導入企業における社内外のコミュニケーション効率とその実態を比較します。

### 4.1 社内コミュニケーションのスピード感

「社内で連絡をとりたい相手とITツールを使って速やかに連絡が取れますか」という設問に対し、両ツールのユーザー間で「部署横断」のコミュニケーションにおいて異なる傾向が現れています。

■ 調査データ:あなたは、連絡をとりたい[同じ部署の相手](#)とデジタルツールを使って速やかに連絡が取れますか？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
速やか	58%	52%
中間層	36%	41%
時間がかかり不便	6%	7%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 調査データ:あなたは、連絡をとりたい[異なる部署の相手](#)とデジタルツールを使って速やかに連絡が取れますか？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
速やか	43%	30%
中間層	52%	70%
時間がかかり不便	5%	0%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- **Microsoft 365 導入企業:** 同じ部署内での連絡は、約6割が「速やかに取れている」と回答しており、所属部署内での円滑なコミュニケーションが実現できています。一方、違う部署のメンバーとの連絡では「速やかに取れている」の割合が約 15 ポイント低下しています (58% → 43%)。これは、Microsoft 365 の中核をなすツール (Teams, Outlook など) は特定のプロジェクトや部署内の密な連携に最適化された設計構造であることが影響していると考えられます。部門間の壁を越えた連携においては、Teams から Outlook (電子メール) へ意図的にチャンネルを切り替える運用がなされることが多く、このツールの使い分けが「即時性 (速やかさ)」のスコア低下に繋がっていると推測されます。
- **Google Workspace 導入企業:** 異なる部署のメンバーとの連絡において「速やかに取れている」の割合 (30%) は Microsoft 365 導入企業 (43%) を下回る水準です。一方、「時間がかかり不便」と回答した層が 0% であることも特徴的です。これは、チャットや Web 会議での即時的なやり取りに加えて、共有ドキュメント上でのコメント機能やタスク割り当てといった「非同期型のコミュニケーション」が定着している可能性を示唆しています。相手からの即座の返答を待たずとも、各自のペースで並行して業務を進めやすいため、連絡のスピード自体が最速でなくとも「業務が滞る不便さ」を感じにくい環境が形成されていると考えられます。

## 4.2 会議の効率性と事前準備の質

会議の生産性を左右する重要な要素として、事前のスケジュール調整の効率性と情報共有の質が挙げられます。ここでは、両ツールにおけるその違いと傾向を調査データの結果をもとに明らかにします。

### ■ 調査データ: あなたは関係者のスケジュール確認や会議招集を容易に行うことができますか？

会議招集の相手	評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
同じ部署のメンバー	容易にできる	80% <ul style="list-style-type: none"> <li>● かなり容易: 38%</li> <li>● やや容易 : 42%</li> </ul>	82% <ul style="list-style-type: none"> <li>● かなり容易: 45%</li> <li>● やや容易 : 37%</li> </ul>
違う部署のメンバー	容易にできる	61% <ul style="list-style-type: none"> <li>● かなり容易: 23%</li> <li>● やや容易 : 38%</li> </ul>	67% <ul style="list-style-type: none"> <li>● かなり容易: 19%</li> <li>● やや容易 : 48%</li> </ul>

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

### ■ 分析と考察:

- **同じ部署のメンバー:** Google Workspace 導入企業が (82%) と Microsoft 365 導入企業 (80%) をわずかに上回っていますが、両ツールとも8割を超える高い水準で部署内のスケジュール調整はスムーズに行わ

れている傾向を示しています。

- 特にGoogle Workspace では「かなり容易」が 45%と突出しており、カレンダーの共有機能が深く浸透していることが伺えます。
- 違う部署のメンバー: 両ツールともに「容易にできる」割合が低下 (M365: -19pt、GW: -15pt) します。Google Workspace 導入企業の方が容易にできる割合がやや高い (61% vs 67%) という傾向を示しています。この低下幅の差異には、各ツールの権限管理の設計思想が影響していると考えられます。
  - Google Workspace では「かなり容易」が 19% と伸び悩んでいます。これは、全社的な運用ルールの徹底や、全従業員における高度な利用習慣の定着が発展途上である企業の割合が多いことを示唆します。
  - Microsoft 365 導入企業 (61%) では、部門単位での厳格な権限管理やテナント設計が施されているケースが多く、他部門のメンバーの詳細な予定がシステム上見えにくい (アクセス権がない) という、強固なガバナンスと引き換えにハードルが存在していると推測されます。特に大規模企業では、Outlook の予定表と Teams の利用頻度が高く、多数の関係者の空き時間確認や会議室予約において優位性が示されているケースもあります。
  - Google Workspace 導入企業 (67%) では、スケジュール調整における部門間の連携は、デフォルトで全社的にカレンダーが公開されるオープンな情報共有のコンセプトを持ち、他部門のメンバーであっても空き時間の検索や確認がシステム上行いやすい環境にあることが、スコアの低下をやや緩和している要因と考えられます。アプリ間でシームレスな情報連携ができる Google Workspace の特性が現れていると言えます。

■ 調査データ: あなたの部署では、会議招集の際、会議の目的や議題、必要資料が事前に共有されていますか。

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
事前に共有されている	65%	70%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- 会議準備の効率: 会議招集時の目的や議題、資料の事前共有について、両プラットフォームともに60%以上の導入企業が「事前に共有されている」と回答しており、ツールを問わず会議前の情報共有がビジネス習慣として広く定着していることがわかります。その上で、Google Workspace 導入企業 (70%) が Microsoft 365 導入企業 (65%) をやや上回る結果となった背景には、予定管理ツールとドキュメント作成ツールの「UI (ユーザーインターフェース) の統合度」が影響していると推測されます。
- Google Workspace では、Google カレンダーの予定作成画面に「会議メモを作成」というボタンがあり、ワンクリックで Google ドキュメントの議事録テンプレートを生成・添付できる設計になっています。これにより、招待状の中に議題や資料リンクが自然に組み込まれ、参加者は会議前に内容を確認し、場合によっては

事前にコメントを入れることができます。このように「予定を押さえるアクション」と「議題の枠組みを用意するアクション」がシームレスに繋がっていることで、主催者がアジェンダを作成・共有する際のシステム上の摩擦（操作のハードル）が下がり、結果として事前共有の実施率を構造的に底上げしていると考えられます。

- Microsoft 365 においても Outlook や Teams を起点とした事前のファイル連携は十分に可能ですが、会議の設定と資料ファイルの作成・添付プロセスが別々のステップとして独立しやすい傾向があり、こうしたワークフローのわずかな手間の違いがデータに表れていると推察されます。

### 4.3 外部企業とのコミュニケーション

社外との連携においても、導入しているプラットフォームのアーキテクチャや市場での普及状況が、コミュニケーション手段の選択に影響を与えている傾向が見られます。

#### ■ 調査データ：外部企業との連絡手段として週に数回以上利用する手段

ツール	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
電話	63%	63%
電子メール	83%	78%
Web 会議	43%	33%
チャットツール	31%	26%
SNS	17%	22%

有効回答社数：Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

#### ■ 分析と考察：

- 外部コミュニケーションの基盤として、どちらのプラットフォームの導入企業においても、電話や電子メールといった手段が依然として最も高い割合を占めています。社内コミュニケーションでは多様なツールの使い分けが進む一方で、社外連携においては、相手のIT環境に依存しない汎用的な手段が依然として中核を担っていることがわかります。
- Microsoft 365 導入企業は Web 会議（43%）やチャットツール（31%）の利用率が Google Workspace 導入企業を上回る結果となりました。これは、Microsoft 365 が国内において市場シェアを有していることから、取引先企業と同じプラットフォーム（Teams など）を利用している確率が高く、ゲスト招待や外部チャットの連携など、シームレスな社外連携が行いやすい環境にあることが主な要因と考えられます。
- Google Workspace 導入企業では、SNS（22%）の利用率が Microsoft 365 導入企業（17%）をやや上回っています。Google Workspace は、アカウントの有無にかかわらずブラウザのみで参加できる Web 会議（

Google Meet) や、URL リンクによるファイル共有など、外部環境に対してオープンな設計思想を持っています。こうしたプラットフォームの特性が、相手の IT 環境に依存しない機動的なコミュニケーション文化を育てており、結果として SNS を含む多様なチャネルを柔軟に組み合わせて社外連携を行う傾向に繋がっていると考えられます。

■ 調査データ: 外部企業との資料の受け渡し手段として週に数回以上利用する手段

ツール	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
紙で郵送またはFAX	15%	11%
電子メールに資料を添付	54%	56%
電子メールに資料を添付 (資料はZIPでパスワードを付ける)	42%	22%
クラウドストレージを使って共有	22%	26%
外部と共有できるファイル共有サービスを使って共有	15%	19%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- Microsoft 365 導入企業において、外部への資料送付時に「電子メールに ZIP パスワード付き (PPAP)」を用いる割合が 42% と、Google Workspace 導入企業の 22% に比べて大幅に高い背景には、取引先の IT 環境 (クラウドストレージへのアクセス制限など) に依存せず、いかなる相手にも確実にデータを届けるための「最も汎用的な外部共有手段」として機能している側面があります。
- Google Workspace 導入企業では、データを社外へ「送信 (持ち出し)」するのではなく、自社のクラウド環境内に取引先を招待し、該当ファイルへのアクセス権を付与するアプローチへの移行が進んでいます。データの実体が自社の管理境界外へ移動しないため、ファイル自体の暗号化 (PPAP) に頼る必要性が低下します。代わりに、閲覧期間の制限やダウンロードの禁止といったシステム上の権限コントロールによって、対外的なセキュリティを担保する運用へとシフトしている傾向が伺えます。

## 5. 【シーン別比較 ②】「情報共有」の意欲度とタイムリー性の比較

～「保管する」文化から「共有する」文化へのパラダイムシフト～

デジタル情報が企業競争力の源泉となる現代において、「情報を保管する」ことから「情報を共有する」ことへの意識転換が急速に進んでいます。本章では、Google Workspace と Microsoft 365 の導入企業における情報共有への意欲度やタイムリー性を比較し、各ツールのアーキテクチャ（設計思想）が組織内の情報流通プロセスにどのような傾向の違いをもたらしているかを明らかにします。単なる機能の差異ではなく、情報の扱い方の違いが、企業のコミュニケーション文化や業務プロセス、意思決定のスピードにどのような影響を与えているのかを探ります。

### 5.1 情報共有の意欲度

■ 調査データ: あなたの部署は、情報共有を積極的に行っていますか？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
積極的	76% <ul style="list-style-type: none"><li>やや行っている :36%</li><li>非常に行っている :39%</li></ul>	81% <ul style="list-style-type: none"><li>やや行っている :59%</li><li>非常に行っている :22%</li></ul>
中間層	15%	11%
消極的	10% <ul style="list-style-type: none"><li>あまり行っていない: 8%</li><li>ほとんど行っていない: 2%</li></ul>	7% <ul style="list-style-type: none"><li>あまり行っていない: 4%</li><li>ほとんど行っていない: 4%</li></ul>

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

「あなたの部署は、情報共有を積極的に行っていますか」という問いに対し、Google Workspace 導入企業において「積極的に行っている」との回答が高い傾向を示しています。これは、前述の「3.1 新しい挑戦と失敗に対する寛容さ」のスコア傾向とも連動しており、組織の柔軟な文化（心理的安全性など）と情報共有の活発さには一定の相関があると考えられます。こうした情報共有のスタイルの違いには、各プラットフォームが持つ「ファイルの作成から共有に至るまでの設計思想」が影響していると思われます。

- **Microsoft 365** 利用企業の傾向: ファイルを作成する際、まずは個人の環境（デスクトップアプリや

OneDrive など)で作業を進め、内容が精査・完成された段階でメール添付や Teams へのアップロードを通じて他者へ展開されるワークフローが定着しやすい設計となっています。この場合、情報は意図的に公開(送信・共有)されるまで作成者の管理下に置かれ、共有には「送信」または「共有」という能動的なアクションが必要です。そのため、未完成なデータや不確実な情報が拡散することを防ぎやすいプロセスと言えます。

- **Google Workspace** 利用企業の傾向: ファイルは最初からクラウド上に作成される設計思想(クラウドネイティブ)により、URL 一つでチームに公開されます。作成の初期段階から「ドラフト」としてチームに共有し、並行して他社のフィードバックを得ながら完成へと近づけていくワークフローが取りやすい設計となっています。共有のための物理的な「ファイルのアップロード・送信」というプロセスが不要となるため、意図的な共有アクションの心理的ハードルが下がりやすく、結果として作成過程における情報共有の頻度とスピードが向上する傾向にあると考えられます。

## 5.2 共有手段の比較

### ■ 調査データ: 情報を共有する際に、よく行う方法(複数回答)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
対話や会議	65%	61%
電子メール	69%	61%
チャットツール	51%	34%
Web 会議	37%	41%
社内 SNS	6%	14%
社内ポータル・掲示板	28%	27%
ファイルサーバー	27%	30%
クラウドストレージ	8%	5%
その他	1%	2%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

### ■ 分析と考察:

- 前述の「5.1 情報共有の意欲度」のデータと併せて見ると、ツール間で特徴的なコミュニケーションの傾向

が確認できます。Google Workspace 導入企業では部署内の自発的な情報共有スコアが高い一方で、日々の業務における電子メールの利用率は Microsoft 365 導入企業を下回る結果となりました。

- これは、Google Workspace 導入企業において、業務連絡をすべてメールで完結させるのではなく、情報の緊急度や内容の性質に応じて、電子メール、Web 会議、チャット、あるいはドキュメント上での直接的なコメント機能やリアルタイムな同時編集といった多様な手段が併用され、目的に合わせたツールの使い分けが定着していると推測されます。
- 一方、Microsoft 365 導入企業において電子メールの利用率が比較的高い水準を保っていることは、Outlook が依然として組織内外のフォーマルな情報伝達やタスク管理の中核を担っていることを示しています。Teams 等のチャットツールとの併用が進む中でも、確実な記録の保持や、複雑な情報の網羅的な伝達手段として、電子メールを中心とした堅実なコミュニケーションフローが維持されている傾向が伺えます。

### 5.3 情報のタイムリー性

ビジネスにおいて情報の鮮度は重要です。両ツールの利用企業が社内での情報共有のタイムリー性において、どのような印象を持っているのか調査しました。

■ 調査データ: あなたの部署では、必要な情報はタイムリーに入手できていると感じますか? (「肯定的な回答」の割合)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
部署内の情報	58% <ul style="list-style-type: none"> <li>● とても感じる :21%</li> <li>● やや感じる :37%</li> </ul>	58% <ul style="list-style-type: none"> <li>● 非常に行っている :26%</li> <li>● やや行っている :32%</li> </ul>
部署外の情報	42% <ul style="list-style-type: none"> <li>● とても感じる :8%</li> <li>● やや感じる :34%</li> </ul>	53% <ul style="list-style-type: none"> <li>● とても感じる :16%</li> <li>● やや感じる :37%</li> </ul>
会社の戦略やビジョンに関する情報	44% <ul style="list-style-type: none"> <li>● とても感じる :13%</li> <li>● やや感じる :30%</li> </ul>	55% <ul style="list-style-type: none"> <li>● とても感じる :18%</li> <li>● やや感じる :37%</li> </ul>

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- 部署内情報 vs. 部署外情報の流通差

部署内の情報と部署外の情報に関する「タイムリーに得られていると感じる」層の割合において、ツール間で異なる傾向が見られました。

- **Microsoft 365** 導入企業では、部署内の情報 (58%) に対して、部署外の情報 (42%) の「感じる」層が 16 ポイント低くなっており、部門をまたいだ情報共有に一定のハードルがあることが伺えます。これは、SharePoint や Teams などが「厳格な権限管理に基づく階層型のファイル管理」を得意とするアーキテクチャであり、機密性を保ちやすい反面、他部門へ情報を展開する際には意図的な共有アクション(権限の再設定等)が必要となる運用特性が影響していると考えられます。
- **Google Workspace** 導入企業では、部署内の情報 (58%) と部署外の情報 (53%) の差が 5 ポイントに留まり、部署を跨いだ情報共有のタイムリー性が比較的高いことがわかります。これは、URLリンクによるフラットな共有設計や、クラウド全体の強力な検索・コラボレーション機能により、権限の許す範囲であれば部署間の情報連携の壁(サイロ化)を越えて情報にアクセスしやすい環境が構築されていることが要因と推測されます。
- **会社の戦略やビジョンに関する情報の浸透度**
  - 「会社の戦略やビジョンに関する情報」がタイムリーに得られていると感じる割合は、Google Workspace 導入企業が Microsoft 365 導入企業を 11 ポイント上回る結果となりました。
  - この差の要因としては、全社ポータル(Google サイト)の構築や全社集会(Google Meet のライブ配信など)といった情報発信の仕組みが、日常的に利用するクラウド環境に統合されており、モバイル端末からも場所を問わず均一にアクセスしやすい点が、経営層からのメッセージの迅速な浸透に寄与している可能性が考えられます。Microsoft 365 においても SharePoint などの高度なポータル機能が存在しますが、全社的な情報伝達基盤として定着させるための設計や運用ルール構築の難易度が、スコアの差として表れていると推測されます。

#### 5.4 考察:ストック型とフロー型の融合

情報共有には、チャットのような「フロー型」と、ドキュメントのような「ストック型」があります。

Microsoft 365 は、コミュニケーション基盤である Teams(フロー)とファイル管理基盤である SharePoint / One Drive(ストック)という「独立した強力なアプリケーション群を連携させる」アーキテクチャを採用しています。各機能が専門的で高度な処理能力を持つ反面、ユーザーには「Teams で共有されたファイルが SharePoint のどの階層に保存されたか分かりにくい」という課題も残ります。そのため、データ構造の理解や、組織としての明確な保存ルールの策定が求められます。一方、Google Workspace は、ドキュメントやスプレッドシートといったファイル自体(ストック)に、コメント機能やタグ付け(スマートキャンバス機能など)といった、コミュニケーション機能(フロー)が統合されているアーキテクチャを採用しています。このように「ファイルという場の中で直接議論し、情報を形にしていく」というプロセスが完結しやすいため、情報とコミュニケーションが一体化して管理されるワークフローが自然と形成されやすい特徴があります。

## 6.【シーン別比較 ③】「資料作成」と「情報検索」の特性の比較

～「探す時間」という見えないコストの削減と、共同作業の革新～

業務プロセスの最適化は、多くの企業にとって喫緊の課題です。本調査では、日常業務の核となる「資料作成」と「情報検索」の二つのタスクに焦点を当て、Microsoft 365 と Google Workspace を導入している企業における利用者の実態を詳細に比較します。ツールによってユーザー体験と生産性にどのような違いをもたらしているのか、データからその傾向を明らかにします。

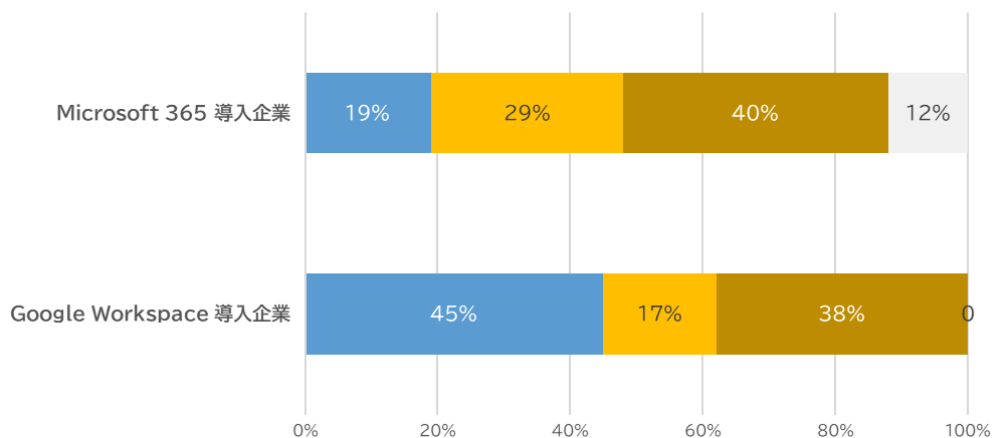
### 6.1 資料作成方法の実態

■ 調査データ: あなたの部署では普段どのように資料を作成していますか？（頻繁に行うと回答した割合）

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
複数のメンバーで資料を同時編集して作成する	19%	45%
複数のメンバーで資料を回覧して作成する	29%	17%
個々人で資料を作成し資料が完成したら上司やメンバーに共有する	40%	38%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

- 複数のメンバーで資料を同時編集して作成する
- 複数のメンバーで資料を回覧して作成する
- 個々人で資料を作成し資料が完成したら上司やメンバーに共有する
- その他



■ 分析と考察:

資料作成のプロセスにおいて、両ツールの導入企業間で特徴的なワークフローの傾向が確認されました。

- 個人の作業と完成後の共有(共通傾向)
  - 「個々人で資料を作成し資料が完成したら上司やメンバーに共有する」という資料作成プロセスは、Microsoft 365、Google Workspace の両導入企業において高い割合を占めています。この結果から、使用するプラットフォームに関わらず、資料作成の基本的な出発点は依然として個人のタスクとして開始される傾向にあることがわかります。
- 同時編集による作成(リアルタイム・コラボレーション方式)
  - 資料作成業務において、両ツール導入企業間で最大の違いとなったのは「同時編集」の浸透度です。Google Workspace 導入企業では 45%と同時編集が広く活用されているのに対し、Microsoft 365 導入企業では 19%にとどまっています。Google Workspace 導入企業では、複数人が同時に同じドキュメントにアクセスして作業を進めるスタイルが定着しており、資料完成までのリードタイム短縮や、アイデアの即時共有に寄与していると考えられます。複数部門が横断してスピーディに意見をすり合わせるプロジェクトや、初期段階のアイデア出しなど、柔軟性と機動力を重視するワークフローと相性が良い作成スタイルと言えます。
- 回覧による作成(順次作成・リレー方式)
  - 「複数のメンバーで資料を回覧して作成する」という非同期の共同作業では、Microsoft 365 導入企業(29%) が、Google Workspace 導入企業(17%)と比較して高い割合を示しています。
  - これは、Microsoft 365 導入企業では、共有フォルダへの格納や段階的な編集といった、「ファイル」を中心とした共同作業プロセスが定着していることを示唆しています。こうしたスタイルは、段階的な確認や承認を伴う業務、あるいは品質管理や個人の責任範囲を明確にする厳格なワークフローにおいて着実な成果創出を支えるスタイルと言えます。
- 資料作成スタイルの比較

スタイル	Microsoft 365 利用企業	Google Workspace 利用企業
主な作成方法	リレー型(順次作成方式) 作成者がベースを構築し、関係者へ順次共有。各ステップで確実な確認と修正を経て完成させる。	コラボレーション型(同時編集方式) 作成者がファイルを作り、URLを共有し、複数人が同時に同じファイルに入り、リアルタイムで加筆・修正する。
運用のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各担当者の責任範囲が明確化される</li> <li>● 構成案の承認を経てから細部を詰める等、品質管理プロセスを厳格に運用しやすい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● フィードバックが即座に反映される</li> <li>● 「誰がどこを編集しているか」が可視化され、チーム一体となった作成が可能</li> </ul>

生産性への影響	段階的な確認と承認を伴うため、成果物の完成度とガバナンスが高度に担保される。	待ち時間を排除した共同作業により、資料完成までのリードタイムが大幅に短縮される。
---------	--	--

## 6.2 資料作成にかけている時間

■ 調査データ:あなたは、資料作成に1週間でどのくらいの時間を費やしていますか？(平均値)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
資料作成	189 分	137 分

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- 資料作成に費やす週あたりの時間は、Microsoft 365 導入企業が 189 分に対し、Google Workspace 導入企業は 137 分であり、52 分の差があります。
- 本調査の回答平均値を比較すると、Google Workspace 導入企業のほうが、約 27.5 % 資料作成時間を短縮できているという結果が出ています。
- 資料作成時間の短縮は、Google Workspace のリアルタイム共同編集機能がより浸透していることが、作業効率の向上に結びついている可能性が考えられます(6.1 資料作成方法の実態)。

## 6.3 資料作成の満足度

■ 調査データ:あなたの部署での資料を作成する時の作成方法に満足していますか？(平均値)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
満足層	33%	26%
中間層	38%	30%
不満層	29%	43%

## ■ 分析と考察:

- 資料作成方法に対する満足度のデータに焦点を当てると、Microsoft 365 導入企業が優位であり、Google Workspace 導入企業には不満層が多いという傾向が明らかになりました。
- Google Workspace が同時編集というスタイルによって資料作成の所要時間(効率性)を大幅に短縮しているにもかかわらず、ユーザーの満足度(26%)は Microsoft 365(33%)よりも低く、不満層(43%)が高いという「ねじれ」を示しています。これは、単純に「効率性が上がれば、満足度が上がる」構図ではないことを示唆しています。
- Google Workspace の高い不満層(43%)は、主に新しい共同作業スタイルである同時編集(コラボレーション型)がもたらす適応コストと従来のデスクトップアプリとの操作感の違いに起因していると考えられます。同時編集では、リアルタイムで作成プロセスが共有されます。ユーザーは慣れるまで「誰に見られているか気になる」という心理的な戸惑いや、完成度の低い状態を見られることへの抵抗感、緻密なレイアウト作成において従来ほどの自由度を感じられないなどの要因が、結果としてツールへの不満につながっている可能性があります。
- 一方、Microsoft 365 導入企業は、満足層(33%)が Google Workspace 導入企業を上回っています。これは、主にリレー方式がもたらす伝統的な業務プロセスの安心感に起因していると考えられます。ファイルが完成するまで他者の目を気にすることなく集中でき、従来のプロセスを維持することで、一定の品質担保や作業の安心感に繋がっているものと考えられます。

## 6.4 メールにかけている時間

## ■ 調査データ: あなたは、メールの作成や返信に 1 週間でどのくらいの時間を費やしていますか? (平均値)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
メール作成・返信	137 分	78 分

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

## ■ 分析と考察:

- 本調査結果からは、Google Workspace を導入している企業の方が、メールの作成および返信にかかる時間が短いという回答傾向が示されました。

## 1. ツールの要因

- Gmail の優先トレイによる「自動分類」や、過去のやり取りが自動的に集約される「スレッド表示」などの機能により、経緯を確認するために過去のメールを探索する時間が抑制されていると推察

されます。また、Gmail の強力な検索機能によって必要な情報を瞬時に見つけ出せることも、情報の再確認や再送を依頼するといった無駄なやり取りを省く要因となっているものと考えられます。

- あわせて、Google Workspace のドキュメントやスプレッドシートに備わった強力な同時編集機能も、従来発生していたメールの往復を不要にしている一因と考えられます。クラウド上で常に最新版が共有される仕組みは「修正版をメールに添付して送る」といったバージョン管理の手間を解消しています。さらに、資料内の特定箇所に対して直接コメントを付けて議論を完結できるため、対象箇所を説明するための煩雑なメールを作成する必要もなくなり、こうした機能の相乗効果が業務の効率化に大きく寄与していると考えられます。

## 2. ワークスタイルの違い

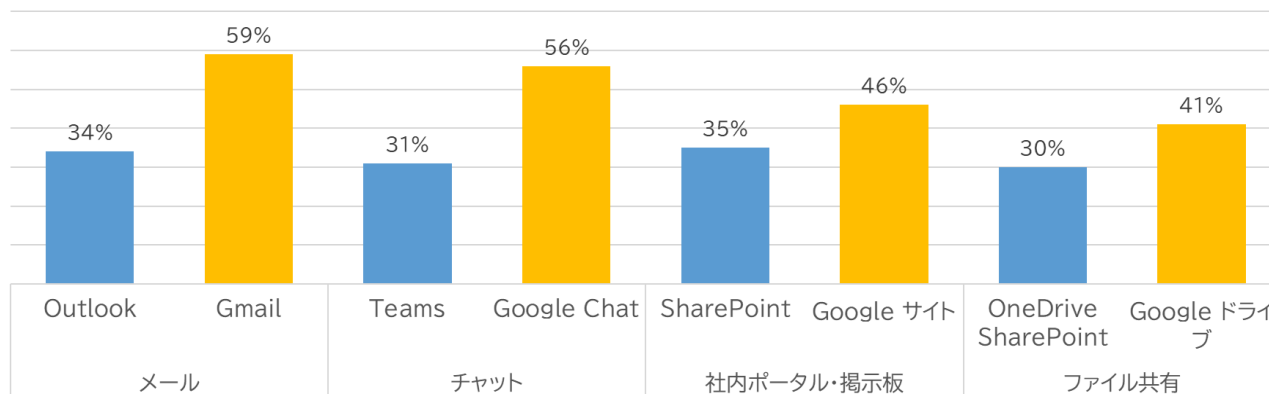
- また、この差はツールの機能差だけでなく、ツールが促進するワークスタイルの違いを反映している可能性もあります。
- Google Workspace 導入企業は、メールだけでなくチャットツール (Google Chat) やドキュメント共有 (Google Drive) を活発に利用し、「メール以外のコミュニケーション手段」で情報を完結させる割合が高く、結果としてメール総量が少なく、一つひとつのメール処理時間も短くなっているのかもしれない。
- Microsoft 365 導入企業は、メールを「確実な合意形成」のためのコミュニケーション手段として重んじるスタイルを維持しているため、結果としてメール処理時間が増加している可能性があります。

## 6.5 情報検索の満足度

下記のグラフは、Microsoft 365 導入企業と Google Workspace 導入企業が利用する主要アプリについて、検索機能の「満足層」の比率を比較したものです。

■ 調査データ: あなたは、利用しているアプリの検索機能に満足していますか

主要アプリ別検索機能の「満足層」の比率



評価	メール	チャット	社内ポータル・ 掲示板	ファイル共有
----	-----	------	----------------	--------

	Outlook	Gmail	Teams	Google Chat	SharePoint	Google サイト	OneDrive SharePoint	Google ドライブ
有効回答社数	143	27	143	27	138	24	143	27
満足層	34%	59%	31%	56%	35%	46%	30%	41%
中間層	31%	15%	45%	22%	41%	25%	47%	30%
不満層	35%	26%	24%	22%	25%	29%	23%	30%

■ 調査データ:あなたは、1日にどのくらいの時間検索を行っていますか？(平均値)

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
1日の検索時間	21分	18分

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

■ 分析と考察:

- 全てのカテゴリにおいて Google Workspace の各アプリは、Microsoft 365 のアプリよりも検索機能の満足層の比率が高いという結果になりました。
- 特に、メールとチャットといった、日常のコミュニケーションの中心となるアプリで、25ポイントという大きな差がついています。
- Google Workspace のアプリが高い検索満足度を誇る背景には、Google が長年培った検索エンジン技術による検索精度と画像内のテキスト(OCR)、過去のチャットログまでを瞬時に横断検索できる能力が大きな要因と考えられます。
  - ユーザーの曖昧なキーワードや過去のやり取りから、最適な情報を迅速かつ正確に提示する検索アルゴリズムの精度が、ユーザーの満足度に直結していると考えられます。

## 7.【シーン別比較 ④】「情報セキュリティ」の実態比較

～デジタルワークスペースにおける情報セキュリティとガバナンスの実態～

業務効率の向上を目指しデジタルワークスペースの導入が進む一方で、機密情報の漏洩対策や文書管理のガバナンスといったセキュリティ面の課題は、企業の信頼性を左右する重要な要素です。本調査では、Microsoft 365 とGoogle Workspace の導入企業を対象に、「文書管理規定の運用状況」「機密情報漏洩対策」「アクセス権設定の利便性」という3つの側面から、両ツールのセキュリティ運用体制とユーザーの利便性の実態を詳細に比較します。ツールの選択がセキュリティ意識と運用負荷にどのような違いをもたらしているのか、データからその傾向を明らかにします。

### 7.1 文書管理規程の運用

■ 調査データ:あなたの会社・団体では、文書の属性に応じた文書管理規程を理解し、正しく運用していますか？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
運用できている	69%	59%
どちらともいえない	13%	22%
運用できていない	18%	19%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

### 7.2 機密情報漏えい対策

■ 調査データ:あなたの会社・団体では、個人情報、開発情報などの機密情報の漏洩を防ぐための対策が十分に取られていますか？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
対策が取れている	70%	63%
どちらともいえない	19%	19%
対策が取れていない	11%	19%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

### 7.3 アクセス権限の不便さ

■ 調査データ:あなたは、社内で情報を共有する際、アクセス権の設定が面倒で不便を感じていますか。

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
不便を感じない	34%	41%
どちらともいえない	33%	30%
不便を感じる	34%	30%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 143 | Google Workspace 導入企業 27

#### ■ 分析と考察:

調査結果から、各プラットフォームのアーキテクチャ(設計思想)が、企業のセキュリティ運用体制とユーザー体験に与える影響が推測されます。

- 文書管理規定の運用と機密情報漏洩対策のいずれにおいても、Microsoft 365 導入企業の方が「運用できている」「対策が取れている」と回答した割合が高く、セキュリティガバナンスへの意識や体制の面で優位にあることが示されています。
- アクセス権設定の不便さでは、Google Workspace 導入企業の方が、Microsoft 365 導入企業と比較して、「不便を感じていない」割合が高い傾向を示しています。Microsoft 365 導入企業は「不便を感じない」「どちらともいえない」「不便を感じる」がほぼ均等(33~34%)に割れており、ユーザー間での習熟度や運用ルールによって感じ方にバラつきがあることが推測されます。
- Microsoft 365 導入企業の傾向
  - Microsoft 365 導入企業は、「文書管理規定の運用(69%)」や「機密情報漏洩対策(70%)」において高いスコアを示しています。これは、Microsoft 365(特に SharePoint や Azure Information Protection などの機能)が、厳格なアクセス制御や文書ライフサイクル管理といった、エンタープライズレベルの高度なガバナンス要求に応える緻密な設計思想を持っているためと考えられます。特に機密性の高い情報を扱う企業にとって、このガバナンスの信頼性の高さがツールの選択理由になっていると考えられます。
  - アクセス権設定において「不便を感じる(34%)」と「不便を感じない(34%)」層が同率で存在しており、強固なガバナンス体制と、ユーザーの利便性とのバランスにおける一側面を示唆しているものと考えられます。
- Google Workspace 導入企業の傾向
  - Google Workspace 導入企業は、アクセス権の設定において「不便を感じない(41%)」層が最も多く、ユーザー視点での共有ハードルの低さがデータに表れています。これは Google Workspace はブラウザベースの直感的かつ統一された操作を前提に設計されており、ファイル共有や権限付与が数クリックで完結します。このシンプルな導線が、ユーザーにとって負担を低く

していると考えられます。

- 「文書管理規定の運用(59%)」や「機密情報漏洩対策(63%)」といったシステムの統制に関するスコアは Microsoft 365 を下回る結果となりました。直感的な操作で情報共有がスピーディに行えるアーキテクチャは業務効率を飛躍させる反面、権限の意図せぬ拡散を防ぐためには、システム依存だけでなく「組織としての明確な運用ルールの策定」や「従業員のリテラシー教育」によるガバナンスの補完が、より強く求められる環境であると言えます。
-

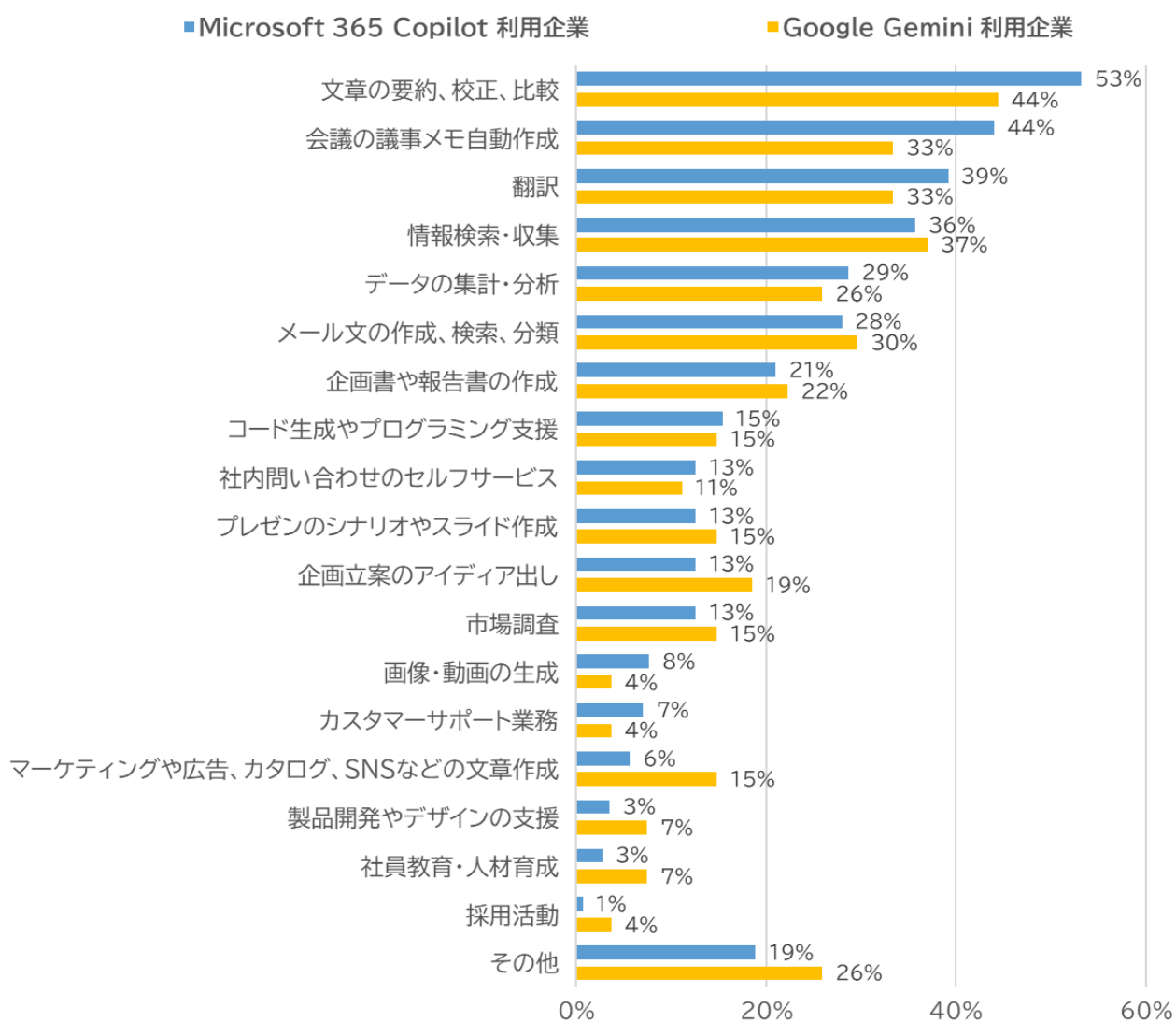
## 8. 【シーン別比較 ⑤】「生成 AI」の利用用途と効果比較

～ Copilot vs Gemini: AI は業務に定着しているか～

本調査では、Microsoft 365 Copilot と Google Gemini を実際に利用している企業を対象に、それらの AI が業務にどの程度利用されていて、効果を発揮しているか、その実態を比較分析します。導入企業が AI の力を最大限に引き出し、真の業務効率化を実現できているのか、具体的なデータからその傾向を明らかにします。

### 8.1 生成 AI 導入企業における利用用途

■ 調査データ: よく利用している生成 AI の用途は？ (複数回答)



有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 57 | Google Workspace 導入企業 12

■ 分析と考察:

- 両ツールとも「文章の要約、校正、比較」が高い利用用途を示しており、AI がドキュメント処理の効率化という共通の課題解決に貢献していることがわかりますが、その他の用途についてはツールごとに異なる特徴が見られます。
- Copilot は「会議の議事メモ自動作成」(44%)で高く利用されており、Teams を中心とした既存の会議・コミュニケーションを起点とした活用が浸透しています。Copilotは、既に Office アプリ内で確立された作業 (Word や PowerPoint での文書作成、Outlook でのメール処理など)を AI が補助・代行する、ポイント・ソリューション的な活用が主な特徴です。
- Gemini は「企画書や報告書の作成」「企画立案のアイデア出し」「マーケティングでの文書作成」といった創造性に関わるタスクでの利用率が高い傾向にあります。
- Google の検索技術をベースに、クラウド上の広範な情報を参照しながら新しいアウトプットを生成する用途での活用が特徴です。
- Copilot は「既存の業務プロセスを効率化」という堅実なアプローチを取っているのに対し、Geminiは「情報活用の強化と新しいアイデアの創出」という、創造的な業務変革というアプローチをユーザーに提供していると考えられます。

## 8.2 生成 AI 導入企業における効果の実態

利用の定着度を示す「利用頻度」と、ユーザーが主観的に感じる「効果実感」において、以下のような差異が確認されました。

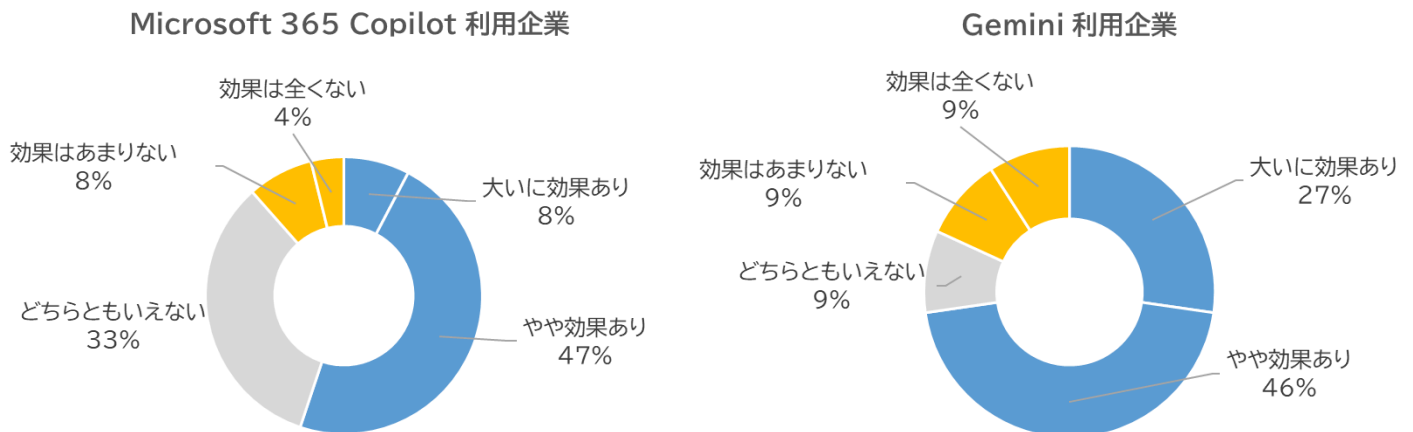
### ■ 調査データ:生成 AI の利用頻度は？

評価	Microsoft 365 導入企業	Google Workspace 導入企業
毎日利用する	16%	25%
週に数回利用する	25%	42%
月に数回利用する	32%	0%
ほとんど利用しない	18%	17%
まったく利用しない	11%	17%

有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 57 | Google Workspace 導入企業 12

※Google Workspace 側の母数が少ないため、参考値としてご覧ください

## ■ 調査データ:生成 AI が効果を発揮していますか？



有効回答社数: Microsoft 365 導入企業 57 | Google Workspace 導入企業 12

## ■ 分析と考察:

調査データに見られる利用頻度や効果実感の差異について、各ツールの提供形態や設計思想の違いから、以下の構造的な要因が推測されます。

調査データに見られる利用頻度や効果実感の差異には、各ツールの機能差だけでなく、提供形態や環境設定といった構造的な要因が影響していると考えられます。

- Google 利用企業では、週 1 回以上、Gemini を利用している割合が 67% に達しており、Microsoft 365 導入企業の 41% を上回っています。生成AIの効果実感については、73% が「効果あり」と回答しました。(※Google Workspace 導入企業側の回答数は12社と限定的であるため、初期導入層における一傾向としての参照を推奨します)。Gemini の利用頻度が高い背景には、2025 年より Google Workspace の標準機能として組み込まれたという提供形態が大きく影響しています。Microsoft 365 Copilot が原則として追加ライセンスを伴う導入であるのに対し、Gemini はほとんどのユーザーにデフォルトで提供されています。ユーザーが能動的にツールを追加導入・設定しなくても AI にアクセスできる環境が、全体の利用率および頻度の数値を構造的に押し上げている主な要因と考えられます。
- Microsoft 365 Copilot は、Word や Excel、PowerPoint といった多機能なアプリケーション群にそれぞれ個別の AI が統合されています。ドキュメント作成やデータ分析など、特定の業務プロセスに対して高度な処理を行う設計であるため、利用タイミングが特定の業務発生時に依存しやすい特徴があります。また、多機能であるがゆえに各アプリケーションで精度の高い結果を得るための「プロンプトのコツ」が多岐に渡るため、各アプリに応じた活用方法の習得状況が、現時点での利用頻度や効果実感の回答分布に影響している可能性が考えられます。

- Gemini の効果実感に寄与している要因として、Google Workspace のクラウドベースのデータ管理（Gmail や Google ドライブ等）との連動が挙げられます。データがクラウド上に一元化されている環境では、AI による横断的なデータ参照が機能しやすくなります。用途調査において Gemini が「情報検索・収集」で相対的に高い数値を示している点からも、この検索・参照基盤との構造的な親和性が、導入初期における効果実感の高さに繋がっていると考えられます。
-

## 9.【まとめ】調査データから見たツール選定のポイント

～戦略的羅針盤：自社の目指すコラボレーションの形はどちらか～

本調査の結果から、Microsoft 365 と Google Workspace は、それぞれ異なる設計思想、価値観や強みを持っており、貴社の現在の業務のプロセスの特性や課題と目指す変革の方向性に合致した選択が不可欠であることが明らかになりました。

### 9.1 Microsoft 365 活用が有効な選択肢となり得る企業像：

Microsoft 365 は、高度なデスクトップ アプリケーションと、盤石なセキュリティ・ガバナンス機能を備えています。「正確性」と「組織の統制」を両立させ、着実な成果を積み上げたい企業に向いていると考えられます。

- Office 資産(Excel/Word)の高度な活用を重視する企業：
  - 精密なレイアウトが求められる外部向け資料や、複雑な関数・マクロを活用した高度なデータ分析など、リッチなクライアントアプリの機能を最大限に活用したい企業に適しています。
- 確実な継続性と安定運用を求める組織：
  - 長年培ってきた業務フローや操作体系を維持することで、ツール変更による現場の混乱を最小限に抑え、着実な生産性向上を図りたい組織に適しています。
- 高度なセキュリティ要件と厳格な情報ガバナンスを最重視する企業：
  - 詳細な権限管理、デバイス制御など、エンタープライズ水準の強固な統制環境を構築したい企業に適しています。文書管理規程の厳密な運用や機密情報漏洩対策において、厳格なガバナンス体制を築きやすい設計思想を持っています。

### 9.2 Google Workspace 活用が有効な選択肢となり得る企業像：

Google Workspace は、クラウドネイティブな環境でのリアルタイムな情報共有を前提とし、部門間のコラボレーションやチームの創造性、効率性を重視したい企業に向いていると考えられます。

- 直感的な操作性(UX)と、情報へのアクセシビリティを重視する企業：
  - シンプルで直感的な操作性と、モバイルアプリからの使いやすさ、優れた検索性能、生成 AI(Gemini)の標準搭載がユーザーに「探す時間の短縮」という明確なメリットを提供し、データ上でも高い満足度を示しています。場所やデバイスを問わない柔軟な働き方を推進したい組織に適しています。
  - 従業員の「使いたい」という肯定的な評価が、ポジティブな行動変容とイノベーションを生み出す源泉となります。その効果を最大化し、新しい協働スタイルを組織に定着させるためのチェンジマネジメントが重要です。
- 非同期・リアルタイムのコラボレーションを定着させたい企業：
  - 「リレー方式(順次作成)」から「コラボレーション方式(同時編集)」へ資料作成プロセスを移行す

るなど、リアルタイムな情報共有の文化を醸成し、チームとしての生産性・創造性の向上に貢献したい組織に適しています。

- 日常的な業務プロセスに AI を自然に組み込みたい企業：
  - 生成 AI(Gemini)が標準搭載されている強みを活かし、追加の立ち上げ操作なく「情報検索」や「アイデア出し」といったタスクで即座に AI を活用・定着させたい組織に適しています。

### 9.3 吉積情報からの提言：データドリブンな意思決定と確実な移行に向けて

ツール選定において重要なのは、「現在の慣習を踏襲すること」だけでなく、「自社が目指す働き方や情報共有のスタイル」にアーキテクチャを適合させることです。DX時代の経営において重要なのは、「これまでどうだったのか」よりも「これからどうありたいか」という視点なのです。本調査で明らかになったように、Microsoft 365 は堅牢なガバナンスと既存資産の深い活用に優れ、Google Workspace はリアルタイムなコラボレーションとフラットな情報アクセスに強みを持っています。

もし貴社が、従来のファイル共有型のプロセスから、同時編集やクラウドネイティブな AI 活用を前提とした新しいワークスタイル(Google Workspace)への移行を検討される場合、既存のオンプレミス環境や Office 文化からの脱却には、単なるシステム導入にとどまらない「チェンジマネジメント(組織文化とプロセスの移行)」が不可欠となります。

しかし、長年親しんだ Office からの移行には不安がつきものです。

吉積情報は、Google Workspace の導入・活用支援において国内トップクラスの知見と実績(Google Cloud Partner Top Engineer 受賞など)を有しています。

単なるライセンス販売にとどまらず、以下のプロセスを通じて貴社のコラボレーション基盤への移行をワンストップで支援いたします。

- 現状の可視化：独自の診断サービス「[ENGAGE UP](#)」を用い、データに基づいた現状分析を行います。
- 最適な計画策定：分析結果に基づき、現場の混乱を最小限に抑える、貴社に最適な移行・運用計画を立案します。
- 定着化の徹底：導入して終わりにせず、新しい協働スタイルや AI(Gemini)を現場が使いこなせるよう伴走サポートいたします。

今こそ、これまでの慣習を見つめ直し、貴社の目指す未来にふさわしいコラボレーション基盤はどちらなのか、再検討してみたいかがでしょうか。貴社の目指す未来の働き方を実現するコラボレーション基盤の検討や、移行への不安・課題がございましたら、ぜひ吉積情報にご相談ください。最適なデジタルワークプレイスの構築に向け、第一歩を共に踏み出しましょう。